

その頃

「過去をして過去を葬らせよ

いそしみ働け 現在を

潑刺たる現在の生活に いそしめ」

昔の人の詩句には反す事ながら、さもなくも歩み來し保育二十五年の細く長き小道を振り返り想ひ起す事ひこつ、二つ、朽葉色の落葉でも腐葉土になつて若芽を育む事もやま、後前もなくかきつらねてみました。

その頃(天正三年)の園兒は、男の子は詰衿の學生服又は紺がすりのつつぽの上に白いエプロンをかけ、女兒は元祿袖の和服又は洋服の上に、胸にレースがあつたり、肩にリボンや飾りが蝶の羽のやうについた白いエプロンをかけてゐた、履物は靴、草履も少数あつた、先生(保姆)は和服に袴で履物は靴、掃除(朝晝午後)の時、粘土の時は襪をかけた、若い保姆の袂には、必らずたすきの玉が、一つや二つは、は入つてゐた。その頃の組の名稱は、一ノ組、二ノ組、三ノ組。三ノ組には三年保育の年少兒(四歳、五歳)

K 子

かし十八名か二十名。二ノ組は二年保育の初の年五歳六歳兒ばかり三十名、一ノ組は二年保育の二年目、三年保育の三年目(六歳七歳三十名ほど)。

一組一室で、机腰掛は、相互中心主義に考案せられた扇型で集める大きな圓形になる最新式のもの、長方形のテーブル式のもの、又机面にたてよこの線のは入つたもの(フレイベルの恩物を取扱ふ爲)等があつた。

その頃の先生(保姆)は八時始業の時は七時前に門の開くか開かずの頃に出勤、まづ襪がけになつて、保育室の窓の開け方にも心じて、から拭き清拭き或は水拭き、塵が清まる、繪本玩具の配置、當日の觀察手技材料の用意もすませ、さあ何時でも待ち受ける頃早く登園の子等一人二人集ひはじめ、花瓶の水換へを幼兒と共にする。

時報は電鈴でなく小使の打ちふるベル又は拍子木の音(現在芝居の開幕の時に使つてゐるもの、但し打ち方は違ふ)毎朝一定時に全園兒が集つて圓になり朝の挨拶の歌を、そ

れから二三、唱歌か遊戯をして各お室に分れる。各保育室でお鼻汁の掃除や爪さりと整容をして、家庭幼稚園往復用のエプロンと幼稚園内用のエプロンをかへ、廣い遊戯室には入る時、新入園児の中必ず三四人は廣い室には入るのをいやがつて泣いた、さうでなくとも、家へ歸りたがつたり、附添ひを慕つたりして泣く子があり、それが淋しげな顔をした子に傳染し、三ノ組の先生は四月五月は、いつも負ふた子に抱いた子さいふ形であつた。

その頃の保育室での仕事は「ヒゴ」に腕藤豆を通す豆細工、四角又は圓形の色紙を折る摺紙、「むぎわら」や紙を「ヒゴ」に通すつなぎ方、鋏で色紙を剪る剪り紙、粘土、お話し、唱歌遊戯 觀察(主として動植物)自由畫は石筆で石版に描いた、たまには鉛筆色鉛筆も使ふた。

運動場には一人乗り又は二人、四人乗りのブランコがあつた其外幼児は先生のお手傳ひで花壇の手入れ、小鳥の餌の世話、金魚の水換等をした。出した玩具をかたづけ、手を洗ひ朝着て來たエプロンに換へて歸るお仕度が出る。「今日のけいこもすみましたさいふ唱歌をしてさよならの御挨拶になつた。お辨當入れは、たてに上下に重つた圓いものが多く、食後含嗽をする齒の衛生は其頃から幼稚園では習慣付けられてゐた。砂場の道具、シャモジ、シャベル、「ふるひ」などは現在と變りなし、積木は箱に入つた小さいもの

が一般に用ひられてゐた、繪本はコドモ、コドモノクニ位で種類が少く、飯事道具も人形も家庭向のものはあつても幼稚園で多數の幼児の使用に適したものは少なかつた、その頃はモンテッソーリ教育法の研究も應用が盛であつた。

大正五、六年になつてクレイヨンが出來自由畫が獎勵されて幼児の描畫に一新期を來し、つゞいて塗繪が盛になつて來た。此頃積木には、ヒル氏の積木が紹介され、床上積木が出現して來た、大正七、八年頃から街の辻々で飴賣りの紙芝居、細く云へば紙人形の芝居は盛であつたが、ギニョールの様な立體人形の保育室に現れ活躍しはじめたのは關東震災後の事、滑り臺、粹昇り、メリーゴラウンド等の運動具が幼児の戶外生活を楽しく活々させたのも、震災後の帝都復興と歩調をそろへてゐたやうに思ふ。幼児の身體と同じ位又それ以上の大きさの箱積木、ここにそれを板と組み合せて使ふ時、幼児達は自分の手で、力で、お友達と一緒に、門や橋や家やを組み建て、それをくぐり、渡り、乗つて遊べるので、亂暴になりがちな男兒の遊びは、注意深く組み建てを考へる事に、又自分だけで及ばぬ事を協力して仕上る事に、眞剣さ潑刺さを加へてグン／＼發展して行つた。此頃から自由遊の指導が一般に重要視される様になつた。大正十三年以後、幼兒の服裝も、先生(保姆)達のもみる／＼洋服化して來た。一方にはダルトンプラン研究

の聲もあり、幼児の遊びを計畫的に、有目的保育へこいふ倉橋先生の理論的なお話が具體的な保育内容になつてドシドシ發展した、幼児の毛筆は大正の半頃から、木工は大正の終り頃から幼児保育に實際化して來て、幼稚園の子供の生活は益々内容が豊になつて來た。

その頃(大正三年から十五年)の幼児、否、園児は新入期によく泣いた、そして自分の思ふやうに描寫出来るのは小學校には入る前の年の二學期終り頃から(例外はある)であつた。

現在の園児は新入期に泣くのが少い。自分の思ふやうに描く事は小學校には入る前の年の一學期はじめ頃から出来る、文字數字、實數に對する興味が早くから出る、智恵づき方が大層早くなつた。社會問題、時事問題を心にこめてゐる。目にうつる體格のよしあしはさしてわからぬが、その頃には聞いた事もなかつた幼児の病氣が近頃増した。中耳炎、百日咳、自家中毒症、嗜眠性腦炎等。

その頃の幼児は、既に成長して、現在大陸日本に働いて居る。

その頃の私は、世に母さへあれば幼稚園は無くともよいと思つてゐた。

現在の私は、幼稚園が無ければ國民教育の基礎は完全し

ないと思つてゐる。

(四九頁より)

事でした。この方法を案出したあの子は、後には疊一帖もある大きな自動車を、巧みな曲線で描き出す技術を習得したのです。家の者達は一錢銅貨の蒐集と消毒に心を使ふ日が續きました。毎日新しい觀察が追加されて、細部から細部にわたつてゆきました。いゝ自動車が出来る毎に悦に入るこいふ具合でした。それが一通り済むと、今度は紙で自動車の形を切り抜き、扉や窓を開閉出来る様に、あの子の技術には過ぎる様な問題を解決しようと思ひます。自動車の玩具もなか／＼氣に入るものがありませんでした。自分の興味本位に生活を築き、自分の學習のプランを追つてゆく事が、あまりに濃厚なあの子は、仲々扱ひ難い子でした。幼稚園に入れて頂いてからは多方面な豊かな刺激も與へられ、様々な個性にも接し、團體的な訓練も受けたせいか、あの子も圓満になつて來た様です。而し幼稚園の様に自由な所でさへ、自分の興味と幼稚園の日課との間に幾分の不調和を感じてゐたらしい様子が見えます。小學校に入つて、一層一定の教育課程を踏まなければならぬあの子は、さうな様にして調和を見出してゆく事でせうか？。